piercing

ピアッシング

piercing

村上 龍

幻冬舎

〈著者紹介〉
村上　龍　1952年長崎県佐世保
美術大学中退。大学在学中76年、
いブルー』で群像新人賞、芥川賞を受賞。主な著書
『コインロッカー・ベイビーズ』『愛と幻想のファシズム』『トパーズ』『イビサ』『五分後の世界』など。

ピアッシング
1994年12月15日　第1刷発行

著　者　村上 龍
発行者　見城 徹

発行所　株式会社 幻冬舎
〒160 東京都新宿区四谷1-22-6

電話:03(5379)8011(編集)
03(5379)8086(営業)
振替:00120-8-767643
印刷・製本所:中央精版印刷株式会社

検印廃止

万一、落丁乱丁のある場合は送料当社負担でお取替致
します。小社宛にお送り下さい。本書の一部あるいは全部を
無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、
著作権の侵害となります。定価はカバーに表示してあります。

©RYU MURAKAMI, GENTOSHA 1994
Printed in Japan
ISBN4-87728-033-2 C0093

ピアッシング

装幀　鈴木成一デザイン室

装画　山口はるみ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

1

ベビーベッドの中に小さな生きものが眠っている。長方形の飼育箱の実験動物みたいだ、と川島昌之は思った。寝室全体が明るくなることのないように、ペンライトを手の平で被(おお)うようにして、赤ん坊のからだのまわりだけを照らす。赤ん坊に顔を近づけて、よく眠ってるな、と声に出さずに呟(つぶや)いた。妻の陽子が妊娠してお腹がどんどん大きくなり、自分の子供が生まれるのだという実感を持った時、赤ん坊が不眠症になったらどうしようと不安になった。川島昌之は小学生の頃からずっと不眠症に悩んできたので、自分の血の半分を受け継ぐ赤ん坊のことを心配したのだった。生まれたばっかりの赤ん坊は一日のほとんどを眠って過ごすっていうからな、寝るのが仕事だって育児評論家が言っていたような気がする、そういう奴が不眠症になったらこんな悲劇はないじゃないか。

そっと振り返って、ダブルベッドの陽子の寝息を確かめる。規則正しい寝息がはっきりと聞こえる。このところこうやって陽子が寝た後で赤ん坊の顔を見る夜が続いている。正確にはきょうで十日目だ。陽子は午前中から働いているので、深夜を過ぎたこの時間には目を覚ますことがないだろう、と川島昌之は思っていた。それに彼女は不眠症なんかとは無縁の健康的な二十九歳の料理研究家だ。専門はパンとお菓子で、大手のメーカーに勤めていたが、結婚を機に退社し今はこの２ＤＫのマンションで近所の人達を相手に教室を開いている。陽子のパンとお菓子の教室は大変な人気があり、女子中学生から主婦、一人暮らしの老人から中年の男性まで数十人の生徒が月に二回の休みを除いて毎日集まってきて、この寝室にまで幸福の象徴のようなバターの香りがあふれている。

赤ん坊は生後四ヶ月で、理恵という名前は陽子の母親がつけてくれた。陽子は理恵を自分で育てている。教室はほとんど女ばかりの集まりなので、陽子が手を離せないような時でも誰かが面倒を見てくれるのだ。

川島昌之は一度ペンライトを消してカーテンの隙間から差し込んでいる月の青白い明か

りを眺めた。弱々しく細い光の帯はベビーベッドのちょうど真中にのびて、赤ん坊にかけられたピンクの毛布と、そのすぐ脇に立っている川島昌之のコーデュロイのズボンのポケットのあたりを照らしている。小さい頃よくあの部屋で月の光だけに照らされてどこまでものびる細い道の絵を描いたな、と思い出しながら、指に先端が触れないように注意して、ズボンのポケットからアイスピックを取り出した。右手にアイスピックを握りしめて、左手で赤ん坊を被っている毛布をそっとまくる。陽子が焼くパンの内部よりもっと白くて柔らかそうな赤ん坊の首と胸の上部が露(あら)わになった。再びペンライトを点(つ)けて頬と首のあたりを照らす。寝室にこもっている、パンが焼き上がる時の匂いが急に濃くなったような気がした。何か他の匂いも混じっているようだ。自分では気付かなかったが額とこめかみに汗が吹き出ていて、その一滴が赤ん坊を包む毛布に垂れていった。壁際のパネルヒーターが部屋全体を暖めてはいるが汗を掻(か)くような室温ではない。アイスピックの先端がかすかに震えている。汗が眉を濡らして目尻からしみ込み、川島昌之は、いやな感じだ、と目を一瞬閉じた。第一オレは自分が汗を掻いていることを知らなかった。汗の感触はなかった。

汗はまるでオレそっくりにつくられた人形かオレそっくりの他人のからだを流れているようだった。本当にいやな感じだ、そういうことを考えて目を開けた時、耳と鼻と目の神経が交錯するところで、何かがバチンと弾(はじ)けた感じがして、焦げ臭い匂いが強く漂ってきた。毛糸とか爪、そういうものが燃える匂いだ。またか、と川島昌之は呟いた。いつもまず汗で始まって、この蛋白質が焼ける匂いが続く。その後にひどい脱力感があって、やがてわけのわからない痛みがやってくる。空気を構成する粒子が針になって全身を刺す、そんな痛み。鳥肌がたつように全身の皮膚にムズムズする痛みが拡がっていって、叫び声を上げそうになる。空気の粒子が針に変わっていくのが実際に見えることもある。その時は視界が白く濁る。落ち着け、と川島昌之は自分に言い聞かせた。落ち着け、お前は大丈夫だ、お前は陽子や赤ん坊を絶対に刺さないと決めたのだから大丈夫だ。手にしたアイスピックを震えないように握り、赤ん坊の頬のあたりに持っていった。先端が尖(とが)ってキラキラ光る細長い金属の棒をこうやって見るたびに、なぜこんなものが世の中に必要なのだろうと思う。氷を砕くだけだったら別の道具がありそうなもんじゃないか。これを発明して製造し

て売っている人達は決して知らない。この尖った先端を見るたびに冷たい汗を掻いてしまう人間がいることを知らないのだ。赤ん坊の唇がかすかに動いている。あまりに小さくて唇には見えない。羽がきれいな虫の蛹(さなぎ)か幼虫のようだ。頬の皮膚にはひどく細かな赤い血管が浮き出て、さらにその上を産毛が被っている。川島昌之はその産毛の先をまず指でなぞるように触れ、次にアイスピックの先端で同じように慎重に触れた。やっぱり大丈夫だ、オレはこの赤ん坊は刺さない、そう思った時だ、陽子の声が背後で聞こえて持っていたアイスピックを落としそうになった。

「ねえ、何してんの?」

ギクリとして全身が震え、アイスピックの先端が赤ん坊の頬に少しだけ触れた。ペンライトを消し、振り向く時にうまくからだの陰にアイスピックを持った手を隠し、ベッドに半分からだを起こしている陽子に近づきながら、先端に注意してズボンのポケットにしまった。

「あ、起こしちゃったか、悪かったな」

そう言ってそっと足を忍ばせてベッドの方に歩いていき、身をかがめて陽子の頬にキス

した。

「今、何時なの？」

「夜中の一時を少し過ぎたところだけど」

「理恵を見ていたの？」

「ああ、でも起こしてしまって本当に悪かった、疲れてるんだからもう目を閉じて寝た方がいいよ」

「まだ仕事してるの？」

「レイアウトは大体終わったよ、あとはポジを選ぶだけだ、そこまでやっとくとプレゼンテーションが楽なんだ」

そうやって話しているうちに陽子はまた眠りに落ちた。寝てくれてよかった、と川島昌之は思った。トイレとか、水を飲むためにリビングの方に来られるとまずかった。汗を掻いているのに気付いただろうし、それにアイスピックは長すぎて、先端がポケットからはみ出ていたからだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

2

キッチンの引き出しにアイスピックをしまい、バスルームで顔を洗って、リビングの隅にある自分の仕事机の前に坐ってもなかなか動悸は鎮まらなかった。喉が渇いていたが、何も飲む気になれない。こういう精神状態になった時には酒を飲むことを自分に禁じている。川島昌之は強い酒を一息に喉に流し込むような飲み方をする。リラックスできるのはほんの短い間で、あとは自分をコントロールするのが難しくなる。意識を失うまで飲み続け、その間のことはほとんど記憶に残らない。

深呼吸をしながらリビングを見回した。リビングルームは、二人の仕事場と化している。応接セットなどはなく分厚い白木の板で作られたL字型のテーブルが部屋の半分以上を占領しているのだ。八人から十人の生徒が同時にパン作りの実習ができる陽子自慢のスウェ

ーデン製のテーブルで、それは川島昌之が貯金をはたいて結婚の時にプレゼントしたものだった。

こんな女と知り合うことができて、お互いを好きになって結婚できるなんて信じられない、ずっと陽子のことをそういう風に思ってきた。二人は同い年で六年前の初夏に銀座の画廊で偶然に出会った。ニコラ・ド・スタールという亡命ロシア人の個展の会場で、地味な抽象画家で大して日本では有名ではないため、土曜の午後だというのに客は二人の他にはいなくて、陽子の方が先に話しかけた。あなたも絵を描くんですか？　その時川島昌之はB3の大きさのスケッチブックを脇に抱えていたのだった。描いているけど、と川島昌之は答えた。陽子はクリーム色のフレームの眼鏡をかけていて、よく似合っていたが、それをとるともっときれいだろうな、と思った。二人で一緒に画廊を出て、ガラス張りで外が見透せる喫茶店に入り、川島昌之はエスプレッソをダブルで、陽子はその店特製のチーズケーキとアップルティをオーダーした。ブラインド越しに初夏の陽差しが柔らかく差し込み、各テーブルにはガラス器に蘭の花が一輪飾ってあった。陽子からはいい匂いがした。

香水と何かが混じり合った匂いだと思ったが、それがパンやお菓子を焼く匂いだと川島昌之にはまだわからなかった。その喫茶店で落ち着いたいい気分でいれて、陽子のことを気に入っていたのでいい匂いだと思ったのだろう。いやな気分の時や、いやな奴と一緒の時はどんな匂いでも嫌悪すべきものとして届いてくる。陽子は、ゆっくりとチーズケーキを食べながら川島昌之の絵を見た。一度、チーズケーキの小さな片(かけ)らが絵の上に落ちて、陽子はそれをていねいに紙ナプキンを使って払った。川島昌之は陽子のその動作がうれしかった。二人は週に一度くらいの間隔で、食事をしたり美術館や映画に行くようになった。その頃川島昌之は既にグラフィックのデザイン事務所で働いていて、会社での仕事とは関係なく自分でも絵を描いていた。月の光に照らされた細く長い道の絵で、それ以外には描く気にならなかったが、夏が終わりかけたある日、陽子の顔を思い浮かべて鉛筆でデッサンしてみた。次のデートの夜にそのデッサンをプレゼントした時、陽子は初めて彼女のアパートに川島昌之を招待して、あることを話した。一年前まで同じ会社のある年上の男と付き合っていて、関係が壊れた日に強い睡眠薬を何十錠も飲んで病院に運ばれた、そうい

う女をどう思うか？　川島昌之は、大したことじゃない、と答えた。本当に、大したことじゃないと思ったのだ。誰だって死にたいと思ったり本当に死のうとすることがある、そう言った。それからしばらくして二人は一緒に暮らすようになった。同棲を始めて半年後のひどく冷える夜、川島昌之はびっしょり濡れて雫が毛布に垂れるほど多量に汗を掻いてベッドから跳ね起きた。どうしたの？　心配そうにそう聞く陽子に、ちょっとその辺を散歩してくるよ、と川島昌之は言って、着換え、外に出て、二時間ほど歩き回った。話してなかったけど時々こうなるんだ、アパートに戻ってから川島昌之はそれまで他人には喋ったことのない話をした。大人になって自分で本を読んで調べたんだけど、夜、に、驚く、と書いて夜驚というらしい。子供の頃はもっとすごかった。さっきみたいに突然起き上がって泣いたり叫んだりする。走り回ることもある。何も憶えてないんだけどとにかく自分が誰なのかわからないくらいの恐怖があって、発作は二、三分続くんだ。まわりの人が誰なのかもわからなくて、夢の中にまわりの人が溶け込んでしまうっていうか、夢の登場人物になってしまうこともある。それは本当に恐いことなんだよ。大人になったら少し軽く

なった。自分が誰だかわからなくなることはないし、さっきも自分に何か話しかけているのが陽子だっていうのはわかったからね。そこまで話した時、陽子が、どうして一人で出て行ったの？　と聞いた。どうしてわたしに抱きついてきてくれなかったの？　川島昌之は答えた。自分をコントロールできなくなった時は誰かと一緒にいないで一人になって歩いたり深呼吸をした方がいいってずっと思ってたんだ。川島昌之は、十九歳の頃にある女をアイスピックで刺したという記憶を除いて、ずっと秘密にしていた過去の一部を陽子に話すことにした。ある女とアイスピックについて話さなかったのは、出来事そのものが自分の中で非常に曖昧になっているのと、そのことを知った陽子が恐くなって去っていくのがいやだったからだ。夜驚のせいもあると思うんだけど、四歳の時にオヤジが死んでからオフクロはオレのことを殴るようになった。ひどく殴るんだ。オヤジのことは何も憶えていないがたまにドライブにみんなで行ったような気がする。オフクロによると、大した稼ぎもないくせに車を買うような奴だったらしい。オフクロとは長いこと会ってないけど、最後に会った時に、オレが高校を卒業した時だけど、あんたがあの人に似てたからだと言

われた。あの人っていうのはオヤジのことだ。写真を見ると弟の方が似てるんだけどそんなことはもうどうでもいい。殴られるのは痛くて恐かったけど、きっとオレが悪い子だから叱ってくれてるんだろうと思った。あれは我慢できるもんなんだよ。殴られてるのは自分じゃないって思い込むんだ。だから痛くないって強く思うと本当に痛くなくなる。でも突然殴られる時はびっくりして恐いから、かあさんはオレを殴る、かあさんはオレを殴るといつも自分にそう言って準備しておく。いやだったのは殴られるのがオレだけだったということだ。弟は決して殴られなかった。神奈川と静岡の境の小さな町で、小田原まで出ると屋上に子供のプレイランドがあるデパートがあって、オレが小学生になってからかな、オフクロは弟だけを連れてそこに行くようになった。外から鍵をかけて閉じ込められたんだ。窓から脱け出して家の前の細い道を追いかけたこともあるよ。そしたら連れ戻されて風呂場の水道に縛りつけられた。その時のことはよく憶えているんだ。そのまま眠ってしまって、暗くなって目を覚ました時に、窓の向こうに道が見えた。小学校の先生が紹介してくれてオレは施設に入ったんだけど、施設に入ってからずっと、夜の細い道の絵ばかり

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook